

## 松屋名物「白鷺緑藻図」考

早川華代

(大学院人間文化総合科学研究科 博士研究員)

### はじめに

松屋とは松屋久行(室町時代後期、生没年不明、本姓・土門)以降、代々「源三郎」を名乗った奈良の塗師屋であり、漆器の製作や販売を手掛けていた。東大寺の守護神・手向山八幡宮の神人(禰宜)でもあり、転害郷に居住していた(松屋邸跡は現・奈良市今小路町)。当時の富裕商人らしく茶の湯を嗜み、奈良だけでなく京都や堺の町衆とも交流が深かった。松屋の日記は現存最古の茶会記として貴重な史料であり、『松屋会記』と呼ばれている。久行の孫にあたる久政(一五二一～一五九八)から始まり、久好(？～一六三三)、久重(一五六七～一六五二)の三代にわたり、約百二十年に及ぶ茶会の記録である。

その松屋が所持していたという名物道具がいわゆる「松屋三名物」である。現在、「松屋肩衝茶入」は根津美術館が所蔵し、重要文化財であるが、南唐時代の画家・徐熙(？～九七五年)が描いたとされる「鷺絵」の掛軸や、茶入などを載せるための「存星長盆」(漆器)については所在不明となっている。

本稿で取り上げるのは、そのうちの「鷺絵」である。鷺絵には、室

町幕府八代將軍・足利義政(一四三六～一四九〇)が所持していたという伝承があるが、偽の伝承であることは自明である。本稿では、大徳寺一六九世住持の天祐紹果(一五八六～一六六六)が記した『徐熙鷺画記』(一六三九年成立)を中心に考察し、伝承が作られた背景や意図についても明らかにしたい。

### 一、「鷺絵」について

松屋名物の「鷺絵」は双幅の絹本彩色画で、池中に二羽の白鷺が立ち、緑藻の間に荷葉及び白花二輪をつけた睡蓮を描いたものであった。松屋久重は茶の湯を通じて親交があった大徳寺住持の天祐紹果に、この絵の由緒について記すことを依頼している。『徐熙鷺画記』は、漢文の記と七言二十二句の詞から成る小編である。詞は前半の記の内容をもとにして作られている。

『喫茶余録 初編』上巻所収の『徐熙鷺画記』によれば、「寛永十六屠維単閼孟秋上澣如意珠日 湖山夢伴子印」と記されているため、寛永十六年(一六三九)七月上旬に書かれたことが分かる(注1)。「喫

『茶余録』は刊本で、文政十二年（一八二九）に名古屋の三友堂東八より出版された。先行の茶書十四点から、茶・茶器・茶人の逸話を抜粋編述した茶書であり、著者は、第十代尾張藩主・徳川斉朝（一七九三～一八五〇）の侍講を務めた儒学者・深田香実（一七七三～一八五〇）である。『徐熙鷺画記』の最後には、「右一卷二仕立有之朱并点者宗春公也トアリ」とある。宗春とは、第七代尾張藩主・徳川宗春（一六九六～一七六四）のことであろう。

また、肥前国平戸藩主・松浦清が文政四年（一八二一）から天保十二年（一八四一）まで書き続けた随筆『甲子夜話』にも、『徐熙鷺画記』とはほぼ同文の詞が『南都松屋名物道具記』という題で掲載されている。しかし、前半の記の部分については記されていない。『甲子夜話』の最後には「寛永十六屠維単閼孟秋上澣如意珠日湖山异伴子判右大徳寺天祐和尚作自筆、朱并点者宗春公也」とある（注2）。

『甲子夜話』の記述を考慮すれば、『喫茶余録』所収『徐熙鷺画記』の底本は、宗春が朱で書き入れをした天祐自筆本ということになるが、本来に天祐の自筆本であったかどうかは、写本の存在を確認できていないので分からない。ちなみに、茶書研究者の末宗廣（一八九〇～一九七七）による『徐熙鷺画記』の翻刻は、どのような本を底本にしているのか、書誌についての情報がないが、『喫茶余録』所収の本文と合致している。

まずは『徐熙鷺画記』の記と詞の内容を簡単に確認しておこう。記は、奈良の都に風流を好む人あり、という松屋に関する説明から始まる。名は久行で、子孫（松永弾正一族也という説明が付されている）は代々茶を嗜み、徐熙の鷺絵の軸を掛けては楽しんでいる。この軸は足利義政の宝軸として伝えられてきたものである。表装は、奈良の茶匠・村田珠光（一四二三～一五〇二）の指図によるもので、細かい部

分は義政の同朋衆・能阿弥（一三九七～一四七一）の手作りである。また、巻き終わりの部分に貼った紙片に書かれた外題には、「白鷺緑藻図徐熙筆左」（「左」は双幅の左側の意）とある。この九つの文字も能阿弥の筆によるものである。義政はこの軸を珠光に与え、珠光は随一の弟子であった興福寺衆徒・古市澄胤（一四五二～一五〇八）に与えた。そして、久行が澄胤からこの軸を与えられてからは、久政・久好・久重と、松屋において代々伝えられている。鷺絵を相続したことにより松屋の名声は高まり、これを見るために客が訪れた。記の後半では、天祐が久重に依頼されて『鷺画記』を記した経緯が述べられている。

続いて詞の説明に移ろう。詞の第一句には「慈照相公遺愛軸」とあり、義政遺愛の軸という説明から始まっている。第三句には「珠光初抜一文字」とある。この句と同内容の文は記には記されていない。一文字とは、作品の天地につける裂（きれ）のことで、軸の中でも重要な部分であるため、通常は上質の裂が使用されるが、珠光は初めて一文字なしで仕立てた。義政以降の絵の伝来については、記と比べると省略され、「久行俊子々相統」とだけ記されている。松屋の名はあちこちで聞かれるようになり、都会でも田舎でも鷺絵は高く評価された。詞には松屋を訪れた客の名が明確に記されている。第十五句に「紹鷗宗易及宗屋」とある。珠光の弟子・武野紹鷗（一五〇二～一五五五）、紹鷗の弟子・宗易（千利休 一五二二～一五九一）、宗屋は古田織部（一五四四～一六一五）のことである。第十六句に「参見数奇道已殊」とある。茶匠として名高い三名は、この絵を見て数奇道（茶の湯）を極めた。以上が『徐熙鷺画記』の概要である。

義政が歴代足利将軍から譲り受け、また自らも収集していた宝物は東山御物と呼ばれている。鷺絵は東山御物であるという伝承が作られ

たが、それは偽の伝承として考えるべきであろう。また、作者は徐熙で、題は「白鷺緑藻図」と記されているが、過去には他の作者説も存在した。

先行研究においてすでに指摘されているように、博多商人の神屋宗湛（一五五〇～一六三五）が残した『宗湛日記』には、元の画家・月山（任仁発、一二五四～一三三七）説が紹介されている（注3）。天正十五年（一五八七）三月二十七日朝、松屋の茶会にただ一人招かれた宗湛は鷺絵について次のように記した。

一白鷺絵、筆ハ汝輝也、又ハ月山ト云人有リ、如何、キヌノ内立三尺四五寸、横一尺六七寸、白鷺は二ツ、蓮ノ葉二ツノ内<sup>卷也</sup>水草ノ葉二所ニセツ有リ、同花二ツ、印三ツアリ、内二ツハ左ノ方ニ上下ニ有リ、同下ノ印ソト大ナリ、右ノ上一ツ、ミナ一寸三分ホトノ印也、

上下茶、中風体小紋ノコイアサキノ段子、露紫也、一文字ナシ、ハチ軸<sup>ナリ</sup>

月山も徐熙も花鳥画の名手として高い評価を受けていたので、作者がどちらであろうと、この絵が唐物であり、貴重な品であると認識されていたことは確かなのであろう（注4）。義政からの伝来という説については『宗湛日記』になく、『鷺画記』成立以前の他の文献にも見られない。堺商人・山上宗二（一五四四～一五九〇）の茶道秘伝書『山上宗二記』によれば、「一徐熙鷺絵 奈良漆師屋。右一軸ハ珠光之昔所持也。」とあるため、珠光が所持していたという伝を、宗二が明記していることだけは確かである（注5）。

また、堺商人・今井宗久（一五二〇～一五九三）の『今井宗久茶湯

日記抜書』永祿十三年（一五七〇）二月二十八日、松屋で行われた茶会記事（客は宗久と宗叱）には次のように書かれている（注6）。

一鷺ノ絵、徐熙ノ筆、珠光ヨリ伝来ノ由、絹ノ内、長サ三尺三寸二分余、ヨコ一尺七寸、表具、上下茶ホケン、中ムクノミ色トンス、風帯中ト同シトンス、一文字ナシ、露紫、

これにも、作者は徐熙で、珠光が所持していたと記されている。能阿弥の外題については触れておらず、表具については記述がある。『今井宗久茶湯日記抜書』は、編纂者により加筆・改変された部分が多いと考えられており、検討には慎重を要するが、義政遺愛の品であったという伝が記されていないことは確認しておきたい（注7）。

従来、鷺絵の評価をめぐっては、持ち主である松屋の人々による資料が重視され、利用されてきた。『茶道辞典』（桑田忠親 東京堂出版 一九五六年）でも、「白鷺の絵」は作者が徐熙で、初め足利義政が所持し、珠光が拝領して改装したと書かれている。しかし、影山純夫も指摘しているように、『鷺画記』等には久重の作意があるように思われる（注8）。偽の伝来が作られた背景には、所蔵者であった松屋が、所持する道具の伝来を権威あるものとすることで、その価値を高めようとする意図があつたのではないかと思われる。

## 二、久政の周辺と松屋名物

前述のように『松屋会記』は松屋久政の代から始まっているが、鷺絵の記述はわずかである（「久重茶会記」寛永十四年（一六三七）十月五日「一利休表具ト云事モ、鷺ノ絵ヨリヲコリタル事ナルソト、委

ク（細川忠興が）永玉ニ御語り候」など）。それは、『松屋会記』が他会記（他者が催した茶会の記録）なので当然とも言える。

一方、現在は『茶道四祖伝書』と呼ばれている松屋が編纂した秘伝書の方に松屋三名物に関する記事が多く残されている。その中で、千利休（一五二一～一五九一）について書かれた伝書の永禄五年（一五六二）十一月二十六日の記事が最も古い。宗易（千利休）・薬師院・石橋宗十の三人の堺衆が久政の茶会に訪れた時のことである。その日は始めから終わりまで鷺絵が掛けられていたと記されている（注9）。これは松屋側による記録であるが、同じ永禄五年、『天王寺屋会記』『宗達他会記』二月十四日にも鷺絵の記事が見える（注10）。『天王寺屋会記』とは、堺商人・津田宗達（一五〇四～一五六六）から三代にわたる茶会の記録である。つまり、少なくとも永禄五年には久政が鷺絵を所持していたと言えるが、管見のかぎりそれ以前の記録には見られない。

『茶道四祖伝書』の利休伝によれば、鷺絵には口伝があったが、持ち主である久政はそのことを知らなかった。天正七年（一五七九）九月に、久政は宗易から伝授された。口伝は珠光からの直伝で、宗易は紹鷗から伝えられたという。鷺絵に口伝があったことは、『山上宗二記』にも「此一幅、猶口伝在り」（茶道古典全集本）と記されているが、口伝の内容については不明である。

また、次のような逸話がある。久政茶会記の天文十一年（一五四二）三月三日の記事によると、久政は鉢屋紹佐（一五一九～一五七二）、少清とともに、堺の紹鷗の茶会に招かれた。そこで、南宋時代の画家・玉澗の「波の絵」を拝見している。この絵は名物であり、『山上宗二記』では「一右玉礪筆波絵 賛無 横絵 堺 納屋宗久」と紹介されている。紹鷗の後は、今井宗久が所持したようである。宗久は紹鷗の娘婿

であった。

茶会の後、久政の宿所に紹鷗から使いの者がやってきた。「宵二宿へ預御使、波ト松嶋ト両種之内、コノミ次第、御飾アルヘキト也、又五郎ハツホヲ望、久政ハ絵ヲ望、終ニ不究候ニ付、イツレ成とも思召次第、可忝候ト返事申もの也、然ハ機嫌能ク両種出候也、」（『茶道古典全集』第九巻）とあるように、紹鷗は「波の絵」か「松島茶壺」どちらか好きな方を飾るように言った。この茶壺こそがまさに東山御物と伝えられる品であり、『宗二記』によると、戦国武将・三好政長（一五〇八～一五四九）が紹鷗へ売却し、その後は今井宗久が所持していた（『波の絵』も宗久が所持）。のちに宗久は織田信長（一五三四～一五八二）に献上したが、本能寺の変（一五八二年）で信長が炎の中で自害した際、この茶壺も失われたという。

紹鷗に言われて又五郎（紹佐）は茶壺を、久政は絵を所望した。結局どちらとも決まらなかったで、その旨を紹鷗に伝えたところ、紹鷗は機嫌よく両方とも出してくれたと伝える。

以上の記事は、松屋久政が茶道具の中でも、特に掛軸とする絵画に深い関心を寄せていたことを想像させるとともに、久政の周辺の茶人たちの間で、義政伝来であると言い伝えられる品が、高い価値を持つものとして珍重されていたことがうかがえる。このような状況があったとすれば、松屋代々の所蔵となった「白鷺緑藻図」という絵画に対して、義政伝来のものであるという伝承が、所蔵者の松屋の者の意図によって作られた可能性も十分あるのではないだろうか。

ちなみに、『山上宗二記』には、鷺絵について「紹鷗・道陳モ褒美セシ絵也、但シ、代物百貫計ト紹鷗ハ云ハレタリ」（茶道古典全集本）と書かれている。南宋の画家・牧谿の絵が、大軸なら千貫、小軸なら五百貫と言われた（『山上宗二記』）のに比べると、鷺絵は高い評価を

受けていた割に安価であったことも留意すべきである。

### 三、天祐による茶書利用

そこで、「白鷺緑藻図」が「慈照相公遺愛軸」であると明記する『徐熙鷺画記』が、いつ誰によってどのように作成されたのかについて、改めて考える必要がある。前述したとおり『鷺画記』の成立は、その詞の年記によれば、寛永十六年（一六三九）であり、久政より二代あとの松屋久重の代である。天祐が久重から依頼され、執筆した事情については記の後半に記されている（引用は末宗廣「鷺の絵」による。訓点も末宗廣による。『喫茶余録』に付されている訓点と同じ）。

予従<sub>レ</sub>北都北嶽<sub>二</sub>過<sub>二</sub>南京南山路<sub>一</sub>入<sub>二</sub>東大寺<sub>一</sub>宿<sub>二</sub>西藏院休<sub>二</sub>憩此<sub>一</sub>  
者十有余日從容謂<sub>レ</sub>予所<sub>レ</sub>願書伝口伝東作<sub>二</sub>一卷記予云如<sub>レ</sub>此名画  
非<sub>二</sub>蒙所<sub>レ</sub>記可<sub>二</sub>就<sub>一</sub>他求<sub>二</sub>峻拒不肯便赴<sub>二</sub>南山<sub>一</sub>然後久重追<sub>レ</sub>跡尋  
来就<sub>レ</sub>予重請又固辞云予從來慮浅才質矧復比年文墨炭氷爭敢肯<sub>レ</sub>  
之久重剛求奥不堪<sub>二</sub>淵然<sub>一</sub>遂隨<sub>二</sub>剛求情<sub>一</sub>謾綴<sub>二</sub>二十余行莞詞<sub>一</sub>

『鷺画記』に「入<sub>二</sub>東大寺<sub>一</sub>宿<sub>二</sub>西藏院休<sub>二</sub>憩此<sub>一</sub>者十有余日」とあるように、天祐は寛永十六年六月前半、東大寺で松屋たちと茶の湯をしながら過ごしていた。日付は『松屋日記』により確認でき、六月三十日には、天祐が宇陀郡の徳源寺にいたことも確認できる（次章で改めて述べる）。天祐は寛永七年（一六三〇）、徳源寺の開祖になっていたため、大徳寺の住持をしつつ、奈良で過<sub>二</sub>す機会も多かったのである。徳源寺は織田信長の息子・信雄（一五五八―一六三〇）の菩提寺である。『鷺画記』中に「赴<sub>二</sub>南山<sub>一</sub>然後久重追<sub>レ</sub>跡尋」とあるが、これは

天祐が徳源寺へ移動すると、久重があとを追ってきたということであろう。久重の強い懇願に負け、天祐は約十日間かけて『鷺画記』を著した。そして完成したのが七月上旬である。

天祐は『鷺画記』を書く際、松屋の日記や秘伝書、『山上宗二記』といった茶書類のような、茶の湯に関連する人々に関する記事に叙述されているような発想を念頭に置いていたのではないだろうか。

たとえば、『鷺画記』には松屋の家系について、「松永弾正一族也」と記されている。松永弾正とは、戦国武将・松永久秀（一五一〇―一五七七）のことである。この説について永島福太郎は「荒唐無稽である」と述べている（注11）。「松屋」という屋号と「松永」、「久行」以下「久政・久好・久重」と代々「久」の字を名に持つ家系と「久秀」という名前の類似が、この「荒唐無稽」な説が生じた一因であるが、もとより血縁関係があつたことを示す史料はない。ただし、松永久秀と松屋の者が茶の湯を介して親交があつたことは、松屋の茶会記から確認できる。久秀と交流があつたのは、松屋久政の代である。

久秀は永祿三年（一五六〇）に多聞山城を築き、一時期大和を支配していたが、最後は信長に攻められ、信貴山城の天守閣を自ら炎上させ、自害したという。この時に「平蜘蛛釜」など、茶道具も一緒に失われた（『山上宗二記』などによる）。久秀は堺の紹鷗や紹佐の茶会に招かれた記録が残っており（『今井宗久茶湯日記抜書』天文二十三年正月二十八日、『松屋会記』（久政茶会記）永祿四年正月十七日）、また自らも茶会を主催する茶人であつた。奈良の塗師屋である松屋久政も、奈良の多聞山城の城主である久秀が城内で催した茶会にたびたび招かれている。

久政茶会記によると、永祿六年（一五六三）正月十一日朝、久政は多聞山城での茶会に参加している。亭主は松永久秀であり、客は興福

寺成福院・医師の曲直瀬道三（一五〇七～一五九四）・松屋久政・堺商人の若狭屋宗可・久秀の家臣である竹内秀勝（？～一五七二）であった。久秀は茶会の内容を詳細に記録している。それによると、当日使用された道具には唐物が多く含まれており、「松本天目」や義満御物の柄杓立、前述の「平蜘蛛釜」も使用されていた。床には玉潤の「晩鐘の絵」が掛けられた。また、茶は「森ノ別儀」とあり、宇治の茶畑・七茗園の中の森園から特に上等の茶を取り寄せていた。正月ということもあり、かなり豪華な茶会が行われたようである。

久政が久秀の茶会に参加したのはこの日だけではない。二年後の永禄八年正月二十九日にも多聞山城に招かれている。客は、松屋以外は堺衆で、松江隆仙・千宗易（利休）、若狭屋宗可の四人であった。この時の記録は前回に比べると詳細に書かれていないが、久秀が一千貫で入手したという唐物茶入「付藻茄子」（現在は静嘉堂文庫美術館所蔵）が使用されていたことが分かる。御茶（濃茶のことか）は今回も「森ノ別儀」であり、薄茶も「無上」と呼ばれる上茶が出されたことから、厚遇を受けていた様子がうかがえる。これらの記録により、松永久秀と松屋は良好な関係を築いていたように見える。だが、もちろん血縁関係があったという事実はない。

ここで興味深いのは、この茶会に同席していた宗易にも松永久秀の親族であるという説が、後世に流布したことである。廣田吉崇によると、『茶祖伝』（一七七〇～一八一九）や『千家系譜』（一八〇四）などの資料に、宗易の後妻である宗恩が松永久秀の妻であったという記述があるため、宗易の養子で女婿でもあった少庵（一五四六～一六一四）の実父は久秀であると信じられていた。ところが、片山九郎右衛門により、少庵の実父が能楽師・宮王三郎三人という小鼓打であるという資料が紹介されてからは、後者の説の方が支持されるよう

になった（注12）。

この宗易の子孫を久秀の血縁とする説の存在は、茶の湯に関わる人々にとって、当代きつての茶人で武将であった久秀の末裔であるという伝承が、自らの血筋を権威付けるものとして意識されていたことを物語る。このことは、『鷲画記』にある「松永弾正一族也」という説がなぜ生まれたかの背景を考える上で参考になるだろう。このような説を必要とする意識は、松屋の者から生じるものであると考えられ、著者の天祐はその意に沿うように『鷲画記』を作成したのではないだろうか。

また、『鷲画記』には「白鷲緑藻図徐熙筆左」という外題について記されている。記には「能阿弥墨痕」とあるが、それも偽の伝承として認識すべきである。なぜなら、能阿弥の外題とは、必ずしも能阿弥の自筆であるとは限らないからである。『山上宗二記』には、「能阿弥ハ御同朋衆ノ内ノ名人、御物ノ御絵ノ外題ヲ書シ人ナリ、（中略）忠昌蔵主手書成故、能阿弥サシズニテ、菓子ノ御絵ノ外題ヲ始テ書シ也、名軸ノ外題多シ」と書かれている。これによると、能阿弥の指図により外題を書いたのは、能書家の忠昌蔵主という人であった。それゆえ、本物の能阿弥の外題かどうかを判別することは難しい。その上、義政の同朋衆は能阿弥だけではなかった。相阿弥（？～一五二五）という人物も同様の活動をしていたのだから非常に紛らわしい。

しかし、久政が能阿弥の鑑定書を見たことがあるという記録は、やはり『松屋会記』に残っている。久政茶会記の永禄十一年（一五六八）正月十九日朝の記事によると、久政は堺の播磨屋正慶の茶会に招かれ、堺衆の薩摩屋宗斤・大和屋正通らとともに「三花の絵」を拝見した。この絵の作者は不明であるが、能阿弥の折紙が付いていた。

茶過テ、三花絵所望シテカ、ル、シヤウヒノ方白キ花、以上六、此内三ヒラク、三中ニサク、葉ハ一八九、中ノシヘキアカシ、印一ツアリ、能阿折紙アリ、上下コン金ラン、中ハアサキ、風帯・一文字シロシ、

この時も久政は絵を所望し、床に掛けてもらうことができた。絵だけでなく、表具についても細部まで観察し、能阿弥の折紙があることも確認している。

久政が数多の茶会に参加し、名物道具を見てきたことは、その茶会記が証明している。さらに、『鷺画記』の著者・天祐も芸術に関して専門的な知識を有していた。しかも大徳寺住持という地位であるから、松屋よりはるかに知名度も高く、宗教的にも文化的にも指導的な立場であった。天祐は、大徳寺方丈庭園を作庭したことで知られている。現存しないが、大徳寺梅厳院の庭も天祐の作であり、大徳寺以外の寺院の作庭も手掛けていた。

また、大徳寺に伝来する「五百羅漢図」（重要文化財）のすでに失われていた部分を、絵師・木村徳応に補作させたのも天祐の事績である。それはちょうど『鷺画記』成立の前年、寛永十五年（一六三八）のことである（注13）。つまり、天祐は当時、絵画に造詣が深い人物として認められていたということであろう。そのような人物だからこそ、松屋が『鷺画記』の執筆を依頼したに違いない。天祐は多くの画賛も残している。天祐の賛が付くことにより、作品の価値が上がるならば書いてもらった方がよいと考えるのは当然である。

能阿弥や相阿弥の鑑定書が人々に信用されていたように、天祐のお墨付きがあることにも価値があったのは事実かもしれないが、天祐が鷺絵の鑑定を正しく行っていたかどうかは疑わしい。しかし、『鷺画記』

に「慈照相公遺愛軸」という由緒が記されたことにより、その後の評価は松屋の期待通りに高まっていた。

たとえば、公家の近衛家熙（一六六七―一七三六）の言行を、侍医・山科道安（一六七七―一七四六）が記した『槐記』に、鷺絵についての記述がある。享保十年（一七二五）正月二十一日条には、「奈良ノ菊屋（※松屋の誤り）ガ所持ノ徐熙ガ鷺ノ画ノ掛物。是レ天下ノ名物ナリ。毎度三菩提院殿ノ見テ置クベシトノ仰ニテ見侍リシガ。如何サマニモ。又類ノアルマジキ見事ノ物ナリ。」と書かれている（注14）。三菩提院とは、興福寺一乗院門跡三十六世の真敬法親王（一六四九―一七〇六）のことである。家熙も絶賛しているが、後水尾天皇の皇子からも高い評価を受けていたことになる。

#### 四、天祐と久重の交流

最後に、『鷺画記』成立前後の天祐と久重の交友関係について考察したい。永島福太郎によれば、久政や久好とは異なり、久重は「同輩の町人らに門戸を鎖し、当時の上流階級への接近のみをはかった」という（注15）。少し大げさな書き方であるが、そのような傾向は確かに見受けられる。上流階級とは、おもに武士や貴族、寺社などを指すと考えられ、大徳寺僧であった天祐もこの中に含まれるだろう。筒井紘一は、なぜ天祐と久重に交流があったのか「思慮が及ばない」と述べつつも、二人の間には「よほど良質な人間関係が成立していた」のではないかと推察している（注16）。天祐と久重がいつ出会ったのかは分からないが、久重茶会記により、二人の交流の様子を確認してきた。

○寛永十一年（一六三四）三月二十三日晩【場所】大徳寺三玄院見性庵（天祐）【参加者】正源院、地藏院、久重

○寛永十二年（一六三五）三月二十七日晩【場所】大徳寺総見院（天祐）【参加者】正源院、地藏院、京ノサンヤ、久重

○寛永十四年（一六三七）六月十一日朝【場所】東大寺見性院【参加者】天祐、知潤、地藏院、久重

○同年六月十三日晩【場所】中屋彦右衛門【参加者】天祐、知潤、見性院、地藏院、上生院、久重

○同年六月十四日昼【場所】東大寺地藏院【参加者】天祐、知潤、見性院、上生院、正源院、禪花坊、久重

○同年六月二十日【場所】東大寺正源院【参加者】天祐、見性院、地藏院、久重

○寛永十六年（一六三九）六月七日晚【場所】三徳【参加者】天祐、久重

○同年六月八日朝【場所】山村彦兵衛【参加者】天祐、久重

○同年六月十一日晚【場所】東大寺見性院【参加者】天祐、久重

○同年六月十二日朝【場所】東大寺西蔵院【目的】天祐の御齋（法会の食事）【参加者】御寺衆三人、野田利兵衛、京キ、ヤウヤノ宗因、三徳、彦兵衛、久重

○同年六月十四日晚【場所】東大寺禪春御坊三倉ノ辺（正倉院）【目的】御月見興行【参加者】天祐、久重

○同年六月三十日晚【場所】徳源寺（天祐）【目的】御見舞（鷺画記）執筆依頼はこの時か【参加者】久重

○同年十月二十六日八時【場所】ハネヤ宗伍【参加者】天祐、久重

○寛永十八年（一六四一）六月二十八日昼【場所】大徳寺三玄院（天祐）【参加者】公家ノ数馬、久重

○同年六月二十九日【場所】大徳寺方丈、聚光院、真珠庵、大仙院、三玄院【目的】寺宝観覧【参加者】板倉重宗（周防守、京都所司代）、永井直清（日向守）、小堀遠州（遠江守）、中坊時祐、板倉二郎左衛門、五味金右衛門、満田道志（京塗師）、久重

○同年同日晩【場所】三玄院（天祐）【目的】非時（午後の食事）【参加者】六月二十九日の参加者か

このように、茶の湯を通じた交流は、『鷺画記』成立（一六三九年七月）の約五年前から確認できる。とくに、寛永十四年と十六年の六月には頻繁に交流している様子がうかがえる。天祐が徳源寺の開祖で、奈良へ来る機会がよくあったことはすでに述べたが、なぜ六月の同じ時期に、しかも東大寺で茶会を行っていたのだろうか。

注目すべきなのは、寛永十四年六月十一日と寛永十六年六月十一日の記事である。両日とも東大寺見性院で茶会を行ったと考えられるが、残念ながら場所と参加者意外の情報は全く記されていない。六月十一日に法事や茶会を行う理由があるとすれば、それは古田織部の命日だからではないだろうか。

周知のとおり、古田織部は戦国武将で茶人としても有名な人物である。京都伏見や堀川にも屋敷があったが、瓶原（京都府木津川市）や井戸堂（奈良県天理市）に領地があったため、奈良に来る機会がよくあった。興福寺大乗院庭園内にあった八窓庵（現在は奈良国立博物館の中庭にある）という茶室は、織部好みの多窓式茶室であり、織部の影響が見られる。

序章でも触れたが、織部が鷺絵を見るために松屋を訪れていたらしいことは、『徐熙鷺画記』の詞に「宗屋」という名で登場していることからうかがえる。松屋と織部の交流は、松屋の『茶道四祖伝書』の



織部伝でも確認できる。実は、織部が松屋を訪れるようになったきっかけは、鷺絵が見たかったからである。織部伝書の天正十三年（一五八五）五月の記事によると、織部は宗易（利休）に数寄の極意を尋ねたところ、「南京（奈良）ノ鷺ノ絵を参得するならバ天下ノ数寄合点行クべし。左（さ）もなくば未ダ参得行」と心得よ。早々下り申せ」と言われたために、松屋久好の茶を所望したという（注17）。桑田忠親によると、慶長三年（一五九八）頃から、織部は息子・重広に知行を譲り、隠居して茶の湯に本腰を入れるようになり、名人として世間にも知られるようになっていたらしい。興福寺多聞院英俊（二五二八〜一五九六）は、「伏見より織部と云茶湯名人来候」（『多聞院日記』慶長四年三月二十二日条）と述べている（注18）。奈良で織部の人気が高かった様子がうかがえる。

織部は大坂の陣（一六一四〜一六一五）で豊臣方に内通した疑いをかけられ、家康（一五四二〜一六一六）に死を命じられた。そして、息子と共に伏見の自邸で切腹したのが、元和元年（一六一五）六月十一日であった。織部の遺骸は大徳寺に葬られ、三玄院に墓所がある（注19）。その三玄院の住持である天祐が、六月十一日に催しを行うとすれば、織部の命日にちなんだものであった可能性は十分あると考えられる。

以上、『松屋会記』により、天祐と久重が大徳寺（京都）や東大寺（奈良）において、茶の湯を介して親交を深めた様子が確認できた。久重は、天祐が徳源寺で療養していた時期に『鷺画記』の執筆を依頼した。鷺絵は常に松屋の家にあり、『鷺画記』も偶然ではあるが、奈良の地で書かれたのである。

## おわりに

本稿では、松屋名物の一つ「白鷺緑藻図」が東山御物である、という伝承が作られた背景や意図について考察した。松屋久重が天祐紹杲に依頼し、作成させた『徐熙鷺画記』には、絵の作者が徐熙であることや、足利義政遺愛の軸という由緒が記されていた。しかし、『徐熙鷺画記』成立以前の他の文献では、村田珠光が所持していたらしいことしか確認できず、作者に関しても徐熙以外の説が存在した。そのため、『鷺画記』に記された伝承は、松屋の者の意図によって作られた可能性が高いと言える。

『鷺画記』により東山御物として認められた鷺絵の価値は、松屋の期待通りに上昇したが、やがて家運が傾き、三名物は松屋の手を離れた。江戸時代後期に大阪へ流出したと言われ、鷺絵は今も所在不明である（注20）。

※『松屋会記』の引用は『茶道古典全集』第九卷（淡交社 一九五六年）により、私に傍線等を施した。

また、『徐熙鷺画記』の引用は、『喫茶余録 初編』および、末宗廣「鷺の絵」『茶書の研究 末宗廣著作集Ⅰ』（思文閣出版 一九八一年）による。↓（初出）『茶道文化』再刊第一号（一九四八年二月）なお、引用の際は、一部の旧字を新字に改めた。

（注1）深田香実『喫茶余録 初編』は、愛知芸術文化センター愛知県図書館ホームページ内の貴重和本デジタルライブラリー

<https://websv.aichi-pref-library.jp/wahon/detail/74.html>（二〇二一

年九月十五日閲覧)や、国立国会図書館デジタルコレクション(DOI: 10.11501/2367773)などで公開されている。

(注2) 引用は東洋文庫三一四『甲子夜話』巻二十八(十九条)(平凡社 一九七七年)による。

(注3) 影山純夫「徐熙筆鸞絵についての諸問題」『茶の湯文化学』第二十八号(茶の湯文化学会 二〇一七年十月)など。『宗湛日記』の引用は『茶道古典全集』第六巻による。私に傍線を施した。

(注4) 東山御物に関して能阿弥や相阿弥が記録した鑑定書『君台観左右帳記』によると、月山も徐熙も「上」の評価を受けている。

(注5) 引用は『茶器名物集』(続群書類従 第十九輯ノ下 遊戯部・飲食部 巻第五六九)による。ただし、『茶道古典全集』第六巻「山上宗二記」では「一徐熙筆 鸞之絵 右ハ珠光所持ス」とあり、松屋所持であることが明記されていない。秘伝書の成立は宗二の晩年で、

天正十六年(一五八八)や天正十七年の奥書を持つ。その頃、すでに松屋は鸞絵を所持していたと考えられるものの、『茶器名物集』(「山上宗二記」と同書)にある「奈良漆師屋」という語は後代の加筆である可能性も否定できない。

(注6) 『茶道古典全集』第十巻

(注7) 神津朝夫『今井宗久茶湯日記抜書』の正体「『茶書研究』第九号(茶書研究会 二〇二〇年九月)では、改竄したのは江戸時代後期の古河藩家老・渡辺信立とするが、信立と今井宗久との関係や、改竄した理由については明確にされていない。

(注8) 前掲(注3)では、鸞絵の表具(軸装)の問題に関して考察されているが、本稿では表具や口伝の内容については触れない。

(注9) 原文は松山米太郎校註『茶道四祖伝書』(秋豊園 一九三三年)を参照した。

(注10) 『茶道古典全集』第七巻に「一床 鸞絵、茶之前」とある。また、同巻の「宗及他會記」天正四年(一五七六)三月一日には、「一鸞絵、初而拝見候、表紙、上下茶色ほけん、中段子、一文字ナシ、」とある。宗及は宗達の息子である。

(注11) 『茶道古典全集』第九巻「解題」

(注12) 廣田吉崇「千宗旦の出自をめぐる『利休血脈論争』について—現代家元システムへの道程」『日本研究』第四十一号(国際日本文化研究センター 二〇一〇年三月)・片山九郎右衛門「少庵の実父」『茶道月報』(茶道月報社 一九四四年六月号)

『茶祖的伝』には、宗恩について「北条美濃守氏規の女也。初ハ松永弾正久秀に嫁す。」と書かれている。

(注13) 奈良国立博物館・東京文化財研究所編『大徳寺伝来五百羅漢図』(思文閣出版 二〇一四年)

(注14) 川崎佐知子『槐記』山科道安自筆本焼失次第「『立命館文学』六三〇号(二〇一三年三月)によれば、山科道安自筆の『槐記』は、明治二十六年(一八九三)に焼失したが、八冊のうち四冊は焼失を免れていたという。しかし、今回の引用部分については自筆本が残っていない。本文の引用は、東坊城徳長校注『槐記』(山田茂助 一九〇〇年)による。

(注15) 前掲(注11)

(注16) 筒井絃二「茶の湯と仏教」第二十一回『淡交』(淡交社 二〇一七年九月)

(注17) 前掲(注9)「註解」一三〇頁参照

(注18) 桑田忠親『古田織部の茶道』(講談社 一九九〇年)六九・七〇頁 ↓(初出)『古田織部』(徳間書店 一九六八年)

(注19) 前掲(注18) 一六二頁によると、織部は生前、三玄院の開祖・

春屋宗園に帰依していた。春屋の『一黙稿』には、春屋が織部に道号をあたえた際の偈がある。織部は印斎と号し、諱を宗屋といつたが、さらに、また、道号を金甫と授けられたことが分かる。

(注20) 前掲(注11)によれば、松屋行顕が嘉永六年(一八五三)に没した後、借銀状が多く見られるようになったという。また、桑田忠親『日本茶道史』一一七―一一八頁(角川書店 一九五四年)には、「白鷺の絵は、幕末に至り、松屋の家運衰頹のため、大坂の道具商伊藤勝兵衛方に入質され、請け出し不可能の結果、何人かに買上げられて、遂に惜しむらくは行方不明となつてしまつた。或は、松屋肩衝(松本肩衝)と共に島津家に納まり、明治十(一八七七)年の西南役の際に鹿児島倉庫で焼失したともいはれてゐる」とあるが、確実な史料があるわけではない。

# Consideration for one of the three special products of Matsuya, " Painting of egret"

HAYAKAWA Hanayo

There was a family called Matsuya whose profession was *Nurishi* (maker of lacquer ware and handiworks) in Nara City. Well-versed in the Japanese tea ceremony, members of the family owned valuable tea utensils called *Karamono* (originated in China) : family treasures handed down from generation to generation. The three special products of Matsuya were called *Matsuya Katatsuki Chaire* (tea container) , *Sagi-e* (painting of egret) , *Zonsei Nagabon* (tray to put tea sets on) . This article describes one of them, " Painting of egret" (picture of white egrets, green algae and landscape) .

Tenryu Shoko (1586-1666) , the 169th chief priest of Daitoku-ji Temple, wrote *Joki Sagi-eki* in Chinese classic writings, in which we confirm the origin of the picture : "Painting of egret" was created by Joki. It was Hisashige MATSUYA (1567-1652) who requested the work from the priest. The picture was owned and loved by Yoshimasa ASHIKAGA (1436-1490) , the eighth shogun of the Muromachi bakufu. The *karamono* stored by shogunke became a noble treasure just because of its owner and had a great reputation.

However, what's written here is not proved to be a historical fact. Whether it is true or not, "Painting of egret" and Matsuya's reputations spread nationwide since this story appeared in the *Joki Sagi-eki*. Therefore, I considered the problems concerning the *Joki Sagi-eki*.